

病院なる人々

By 風っ子

第4話 歌う人

田中浩二は最近少し落ち込んでいた。

二ヶ月近く入院している母は、これといって良くなっている風でもない。毎日半分眠っているような顔をして、ぼんやり田中を見ている。

「オフクロさん、もう少ししっかり目を開いてや！あんだけしっかりもんのシャキシャキしたあんたはどこへ行ってしもたんや！」

ついつい田中の声が荒いでしまう。

6人部屋のこの部屋の患者もみんな同じようなものだ。一日の大半を眠って過ごしている。起きている時も、田中の母親のように半分目を閉じているような状態だ。

「おばあちゃん、ちゃんと目を開けて食べないとだめよ！」

「ほら、もっと食べないと元気にならないよ！」

「もうおしまい？ちっとも食べてないじゃないの」

食事のたびに、こんなセリフがあちこちから聞こえてくる。毎度おなじみの食事風景である。

田中も同じようなことを言っているにちがいない。大分後退したおでこの汗を拭きながら田中は苦笑いした。

もうそろそろひと月になる。梅雨に入り、蒸し暑い日が多くなる。この頃とみにお腹がでてきた田中にはつらい季節だ。

『後、何日、いや、何ヶ月こうしていないといけなんだろう』

単身赴任の経験がない田中にとって、ひと月近く家を離れるなどという経験は初めてだし、遠く大阪に残してきた家族のことも気になっている。しかし、そう思っても帰れるわけでもなし、...二人きょうだいの姉は、夫の赴任先のニューヨークに居り、おいそれとは帰って来れない...努めて考え込まないようにしている。

「ねえ、田中さん、また入力まちがっていますよ。困るんだよな、また初めからやり直しですよ...」『もう、役に立たないんだから』

後の部分はさすがに飲み込んだようだ。

「すまんー、どうもこのパソコンというやつは性に会わんわ」

入社2年目の同僚に注意された。まあ、いつものことだ。田中もあまり気にしていない。

ソロバン一級の田中は、この経理課で、かつて有能だった。商業高校を出た後、経理専門学校に通い、この会社に就職した。

5・6年前から、小さなこの会社にもコンピュータが導入され、特に経理部門はその性格上、すべてがコンピュータ化された。それと同時に、コンピュータの操作をするために若い社員が採用され、今まで田中がしていた倍以上の仕事をするようになった。当然田中の仕事がなくなってきた。

今は、資料の整理と一番単純な、数値の入力だけが田中の仕事となった。ソロバン1級の能力はまったく使い物にならなくなった。

例のコンピュータ2000年問題の時に、田中は、すべてのコンピュータが狂いだし、使い物にならなくなったらいいと密かに思った。その時こそ自分の能力が久しぶりに活かされるのだ、と大いに期待した。

1999年12月31日、つまり大晦日の日に田中は会社に泊まりこんだ。コンピュータ2000年問題に備えてである。田中は自ら志願して泊り込んだのである。

11時59分、いよいよカウントダウン開始だ。田中は期待で心臓が異常にドキドキするのを感じていた。

『こわれろー！こわれろー！一斉に狂いだし、パニックになれー！』

田中は祈った。

「スリー、ツー、ワン、ゼロ！」

突然4台のパソコンのディスプレイが消えた。

『やったー！』

田中はガッツポーズを取りたいのを必死に抑えた。

コンピュータ担当の若い社員が驚いて、調べだした。

「変だぞー、電源が入らない。くそー、これがコンピュータの誤作動かー」

必死で機械の後ろや、電源などを調べている。

その時、後ろで女子社員の声がした。

「ごめーん、コンセントはずしちゃったー。だってー夢中になってカウントダウンしてたもんだから、興奮しちゃってコンセント、蹴っちゃったー」

この会社は一つのコンセントから4台のパソコンの電源をたこ足で取っているの、ひとつはずすと全部の電源が切れてしまう。

田中の落胆は想像を絶するものがあった。

「田中さん、もう大丈夫ですよ、安心してください。もう帰ってもらっていいですよ」

しばらく放心状態だった田中が

「よよよよよ、よかったなー。これで安心だ。」

ちっとも安心でも、うれしそうでもない声で、田中はやっとそう言った。

大晦日で、夜通し運転している電車に乗りながら田中はつぶやいた。

「マスコミは騒ぎすぎだよ。何が2000年問題だ、クソッタレー！」

以来、田中は、例えマスコミが地球崩壊を叫ぼうが、絶対信じないぞと心に誓った。

そんな田中が、母の急病、入院、手術のために介護休暇を申請した時も、上司も同僚も、半ばほっとしたような顔をして

「そうか、それは大変だ、会社の方は大丈夫だから、ゆっくり介護してきなさい。半年か？1年か？」

などと言っていた。

「ガチャーン」

食器の落ちた音で、田中はフッと我に返る。

母親が半分眠って食べているもので、食器を落としてしまったのだ。

「おふくろさん、あかんよ眠って食べちゃー。ほら、グチャグチャやないかー」

まあ、どうせ残すんだからいいかー

そう思いながら、食器を拾おうとかがんだ時、

「雨ふりーお月さん雲のなーかー ...」

突然唄声が聞こえてきた。田中は耳をうたがった。

決して上手ではないが、何だか心にしみる、懐かしい唄声だった。

声の方を見ると、向かいのベッドの老婆が珍しくしっかり目を開いて唄っているのだった。

か細い声ではあるが、しっかりと部屋中に響き渡った。

田中の母親も、隣の老婆もその隣の老婆もみんな、ベッドに体を少し起こし、半分目を開けながら弱々しくもしっかりと、微笑みながら拍手をした。

介護の娘や、おばさんたちも、もちろん田中も、みーんな拍手した。

部屋中が、弱々しいが暖かく、はっきりした拍手でいっぱいになった。

「もう少し、がんばろうか...」

と、田中は小さくつぶやいた。

第4話 完